

精密総合健診(人間ドック)

動 向

平成13年度の人間ドック受診者数は、ここ数年の減少傾向から増加へと転じた。

具体的数値としては平成12年度の9,090名から9,382名と292名の増加である。

長引く経済不況の影響を受け、その主たる実施母体である健康保険組合の疾病予防費の削減などの逆風の中においても、急速な高齢化社会への不安、生活の質的向上(QOL)の観点から、個々人の健康意識は維持されつつあると思われる。

また、弊会における継続受診率については、資料編でも記載のとおり5年連続受診(全体の35.6%)を筆頭に、約60%以上ある。この数値に満足することなく、より魅力ある人間ドックの提供が必要である。また継続的に受診していただくことによる検査データなどの蓄積により、受診者本意に立った検査項目などメリットもなくてはならない。

個々の受診者ニーズに適応した健診内容の充実と効果的なフォローアップシステムにより、真に役立つ健康支援システムとしての人間ドックの提供をおこなっていく。

方法と結果

年度別受診状況を見ると、下げ止まりの傾向である。男性受診者が、平成6年をピークに漸減しているが、女性受診者は、平成11年から増加しており、今後は、女性に特化したドック構成も考える必要がある。男性受診数が漸減しているが、原因を探る必要もある。

受診前歴をみると、連続受診率はほぼ同じ傾向だが、女性の初回受診が微増している。総合判定区分内訳をみると、異常なしA、心配なしBを全てクリアしている受診者は、数%で、要経過観察Cをいれても10%程度で、この傾向は変化ない。

がんの新規発見を症例別にみると、本年度は、全体でも17例(0.18%)と、平成6年度の43名(0.43%)と比べて減少している。内訳を見ると、大腸がんが、平成5、6年度は、それぞれ10名だったが、平成12、13年では0である。また、肺がんについては螺旋型CT導入時の平成10、11年度に6名づつの発見であったが、本年度は0であった。その一方で、乳がんの発見が平成12、13年度は4と増加傾向が見られる。子宮頸がん、体がんについてはほぼ横ばいである。前立腺がんについては、「研究事業」を参照のこと。甲状腺がんは、ほぼ同程度である。

主な異常所見の有所見数の変化をみると、肥満者は、

男女とも増加傾向、視力低下、聴力低下は男性は女性の2倍程度で傾向に変化はない。高眼圧は、平成10年をピークにやや減少傾向にある。

腎泌尿器異常は、ほぼ同じである。脂質代謝異常は、男性34.7%、女性44.2%であり、男性は40-49歳をピークに中性脂肪が高く、女性は加齢とともに、総コレステロールが上昇する。LDLの直接測定では、LDL>140mg/dlは、男性1,564名(28.9%)、女性1,177名(29.6%)で、総コレステロール値と同様の傾向を示す。LDLについては、2002年2月の日本動脈硬化学会でも独立因子とされ、今後疾患重症度の比重が大きくなると推定されるので、受診者にも積極的に結果を知らせていくことが望ましい。

尿酸高値は、平成12年度から、再び上昇傾向にあり、男女とも各年代で均等に上昇している。2002年8月に、尿酸核酸代謝学会で新しい尿酸痛風ガイドラインが発表されて、血中尿酸のコントロールだけでなく尿路系のPH管理も重要であるとアナウンスされた。さらに、尿酸は動脈硬化の重要な因子であることが再認識されているので、高尿酸血症は今後重要な人間ドックの予後指導に重要である。

循環器の所見、高血圧、心電図異常、レントゲン上の心拡大の程度は、ほぼ変化がない。胸部X線異常は、一昨年とほぼ同じ傾向、胸部CTは、例年と同じ傾向である。

肝機能障害は、例年と同じ傾向であり、HBV、HCVなど肝炎ウイルススクリーニングについてもほぼ同じである。

人間ドックで、HCV抗体について、はじめて指摘されたものは、19名あり、人間ドックでのスクリーニング検査は、まだ重要な課題である。

腹部超音波による胆石、胆嚢ポリープ、肝血管腫の頻度は変化がない。胃の所見、便検査(便潜血、寄生虫)にも傾向に変化はない。安静時心電図所見の内訳は、例年同様である。

過去10年の理学所見、血液生化学のトレンドを比較していくと興味深い。身長、体重、肥満度がわずかながら増加している。また、種々の報告もあるが、我が人間ドックにおいてもコレステロールの増加が女性に多く、アメリカの統計では減少傾向が出てきたのに比べても、栄養指導、運動指導の生活指導の重要性を訴えたい。尿酸も同様に増加傾向にある。また空腹時血糖、HbA1Cも微増傾向にある。これらを踏まえると、動脈硬化関連疾患の増加がまだまだ続くと予測される。

関係の集計表は152～156頁に掲載